



117
49
4

牛馬問卷之四

目録

- 叙と矢ふ作 一
- 爲賊の墨 二
- 虚構 三
- 人相 四
- 猿の叙術 五
- 字紙の句 六
- 初才老学 七
- 一の字例 八
- 雄水跡の分英 九
- 一の字例 九
- 又筆和尚 九
- 博奕 十
- 九字十字 十
- 下馬札 十一
- 嘉祥の院 十二
- 兼套符 十二
- 氏の新 十三
- カレダ帚 十四

牛馬問目録

輟耕造一本八刺とゆふの毒ととも小版に毒
令穢めて肉を刺して口に入るとは此の毒も
夫出た客に社に毒も肉を喰う事及至て起
茶とすむ心あるは及んで猶も向うに令穢
失ふ者なり受たり時よりりの由得例して
後仕はる痛れをせしむる終る穢なり
起すて命を損ふ歳去て存屋穢整ふて
上の垢を掃くも忽ち穢を起す
声も起して穢れなり向う失ふ者なり令穢朽骨と
とも墜る所以とすつれは猶も肉を喰ふ
時令穢肉を刺しぬるともはる去る世得見

あり不及して飛上死に衰むる事のあはれ
果といふも和漢同目の後のごともはる去る

○一客を以て我活と一人自我船而海を去る舟
郎曰希見事と云ふ者見相志ありと云ふ
手指と云ふ見れぬ大なる蛇を陰て水中と親し
水中より大なる鳥滅せしむる蛇と云ふ人の
ある相問をくたりぬる鳥滅せしむる蛇と云ふ
蛇小なり蛇かくれぬ蛇と云ふ海の中なる
の奇と感せしむる一を度又他はして我活と云
乃曰逆を以て人鳥賊を料理するは

丁の業は味方いふ鳥賊とあり方とあり後
 中の業は味方いふ鳥賊とあり方とあり後
 鳥賊の毒腹乃毒試解ゆといふ世五人の活試
 小鳥賊乃毒試蛇の毒を解す事類ひなり本草
 に鳥賊骨 海蝶蛸 蝎螫疼痛を治とわれり墨の
 能と不裁始く書して治る事あり

○菅氏く白盧橘とは何物也 予く白杜若種類
 多く同名異種なりものも先ん本草の合標と
 いふのありて世俗合標といふ是なり 菅氏く曰
 枇杷 ビハ 枇杷 ビハ 予く白文選の注強て枇杷とす
 事細目 キク 枇杷 ビハ 注を付て及んて 杜若 ニク 秘傳
 記 クハキヤウ 枇杷 ビハ 一名魚橘との在選注と強強なり
 菅氏く白志くく載 タイ 叔備 ウチノボ 湘南 シヤウナン 此待魚橘 イサノキ 蘇
 楓葉 フキ 蘇の向解 ウケトク 予く白杜若魚橘 イサノキ 楓葉
 一時 イツ 之 ノ 誤以て流 リウ 注 シュ ありて解 トク 不 フ 解 トク の ノ 注
 と解 トク の ノ 誤 トク 又 マタ 之 ノ 誤 トク と ノ 向 ウケ 意 トク を トク 解 トク くと トク 及 マタ 之 ノ 誤 トク
 倫 リン 湘 シヤウ 南 ナン ありて トク 東 トウ 京 キヤウ の ノ 京 キヤウ 工 コウ 爲 メイ 人 ニン 事 ジ 也 トク 也 トク 也 トク 也

どのに附去水流を位するを記と歎せし
 ろていふ我は流南水来て世水色不遊ひ一は魚
 橋の記の用く比なり一ふ今来て見れ早楓葉
 此舞の時言し世は月かたはる方我は都一の
 さり事やと解何の理處一昔ま世菅氏
 世よりけるは大雅堂ふかこれ大雅堂曰然因
 法師うたはる事とともに出ての意思と
 て同世せし我を信又大雅和尚は解と見て死
 法師う雅岐の書は長あれやの意思とて又
 同世せし二意の意同激ふ出たかの腐説を
 考へて後笑の事と云

〇或人の曰人相の流を原不為大抵強心の法は
 将興とあり少一形と相するは心は論よりふる
 加し荀子非相篇と作て是るもふ意ありの
 訓日むるもと世は術さうんあて又盲法陋が
 軍かみ強揚て人の貴強禍福といふを強と名
 小一かと以て衣被乃強起ふあて禍福をらま
 門と名あ一富ふ人々貴一強なり人は是ふ凶也
 人々是る記りの記 予う白を術と拙して
 信て強とりとひるもの何れお老のこたらんや
 其庸下なり強て一切小量と被と一枝の枯る
 と見て其幹は成小果あるを術の妙なり

人丁を産む者も一不奇ありのころは、
開く一切の相法を破るも心は誠意あり、
徳を以て是れおせしむる者今も奇なり、
予親しく是れ見せしむる元の間、
鬼眼といふ一人彼に鬼眼を指して曰く、
富の人なり、
命数定まり客懼れて海を舟し八月乃初し、
子にといふ舟をこぼし、
天小仰てたまふげ、
お錢より七賣賞、
御利分を以て日用と爲さるかくのよ、
今家

を本錢と失ふ身のおき、
小面錢合ふさま、
めんとの客款、
るう、
鬼眼の、
むり、
予、
彼、
人、
去、
壽、

馬周回

五

まゝと感歎して旅のつらさを思ふに及ばず
居眠りして曰く林中林は何れ死むる所ぞ
と見て笑て曰く是陰徳の致す所也
女陽の命を救ふ事人容其術と奇と
多く古書亦見ゆ故人歎と歎と河
人よ重て復信と云ふ事

○柳生但もも扇様と或は阿の言を
して細物とありては様もも
細心の事子前といひも世様亦
浪人様を自慢して何と云
縁と求てあり對面の段板松
と云ふ事

名將之流天下といふ但別々
世様と云ふ事と此の浪人大
き形も亦て是はあまかり事
先き合ふてはれりとも是は
くれ様も竹具は面鏡は小
みよ合波りの只一突は突
くくと曲て何乃造作も
お遠し今一死と云はれ又
まふ又は様も亦て目よつ
又板のりては對面の段板
と云ふ事

とらぬれん但州波西ひ元平ふも方工吏先りも
津介上達し今夜は様ども中く務事成りしとま
ごも立合入るる並此とて様とあふりおまにお向ひ
いましを様を出さりお様大不啼てぬしとぬり件此
男も但州の門中と存り奥義を傳へりといされ
様とて元平の西様志の心人本のもを様知説や人
とてあゆと使へりといや

○元平石山よりのて堂とて
ふとて堂より大御埋り方なりしれ
童子のころふらえ曰死堂なりと高紙巻き
池の川大なる山ありははるるが

は童子の何りのれや又仔細の目代八牧乃初官並
陸頼好み討れて辰枝一敷とて返答使書に
文通とよとわそ文小法記経用八巻心成仏身と
るる能くして漢の心より子陸庇のうらわ我
の小児乃そ文通とよととるる乃陸庇とて
法のをれ法の子りひくくは八枝子
わらけ乃乃と持たらしるる

又ひり南殿の海中小舟はふとちよる生
々るは候好乃茶のねと衣のりなりとて
わ地のく派方とてと勅院ありおは武部と
やん六枝の附我よりけり海へとて

多青のり斬るもく収よき海に葉

さるるも更しぬ古子影かけ里

か疎しつらふ消滅しつらといふは影ひ和漢大

多く惜し方事なれども古人に格別首附知文知藝

多の肉も古人を以て比喩となすは是れ是れ

遅速を端しりて既わらうとて一代出見の文字を

わらうとて美しけりも成長の夜に筆と見ん事

覚来なりし凡人の知文知藝をわらうはわらうは

そのおもむきを以て凡人とて美美とみれば是

知得智恵はくみ得てよき名人とも悔りこれ

りこれ小思しけり成人の夜を今もわらうは

平は事と付しつらふは取来徳園の初才を以て

抵悪くも不遠海とてわらう知人むらう名人は

仁在場と見言と見しつらふ仁在場は白を元片は

と拍子利しつらふと拍子利しつらふと拍子利し

練しつらふ拍子利しつらふは其の拍子とては是れ

つらふけ厚くも名人の拍子却て不拍とありんとい

ひしつらふは老人今も存命おとけは事と練

ぬ事是在すも感懐るさねえつらう名人仁在場と

今も練しつらふ藝の妙も又あるもの

○宋の注はつらふとて六十七つとて始て書を字ひ七

十八の史記一部と書字を細字なりしと體乃

あはれは... 二二二日... 定家

その... 二二二日... 定家

の... 二二二日... 定家

○東人の曰白... 天目... 御乃... 神のお... 乃や... 又旨... 是た... とい... 名... 二二二日...

曰握管... 和尚... 筆... 最... 曲... 二二二日...

今... 心... 持... 上... 二二二日...

性よま交よすし事よ力よ片防りまけし百射たせ
理よのひて方よふて務り六海よ片は海ていひ
すくち知を證せし競ひ死ふすし事七盜よふ人の
目試くし海よめく半八害よふ前の子多て欲て
ましくも息くし射とおよと切殺して死らむ所の
仕方なりしと書しり切りし人む害せしれい色と
害と害必記りありし非道の欲と貪りの
甚しきこれ

○或人の曰世ふ秘する所の九字十字といふのはを
本佛部よりかきりて道家より出たり也 曰儒教道
の法よありしはなりしは世無術部より出て今多

僧徒山伏等々の専門となり軍林室繼軍務部
た云望り周公且ふ教しとわれしと大方の意は
を從りし今の真字乃ち書を見えて況て作りて
篆書の義は一向ふありしもの偽作なり
闕乃字門裏裁豆長一寸と云は是今通俗
の偽文と見て作り闕と門ふありし門ふの字
を以て五字を世多く門門と誤り混し中此断
と畧書して射と書来り闘と闘と誤り混し是
周公の海何れは字辨わんを文皆知ありしと
を他皆めくのとくし今世ふ傳ふ九字は各家の法と
雜合してなり 或人の曰九字の文字は十字と

一書列四

上

いすのめり 曰陰兵闘者皆陣列在前に

九字形七是不勝の二字を加へて十字形り

○或人の曰具是櫛示衆の字紙書く事又下馬

礼の事あり 曰下馬礼を以て之を以て十字形と云

藤一太三郎と申す事其家秘傳の事あり

秘傳の事ありしりは不傳と云守護神なりと

秘傳の事ありしりは不傳と云持明院中納言

基村卿より御家傳九箇條の大秘事免許事及

家管原先代統傳と交継又武家方の傳は密

又左衛門尚祐先代より傳來と傳てしりは

秘密と聞てしりは其書を見たりしりは十字形乃

は授て聞て人(皆侍奉)の之先師の書並個之を

を代徳の二字礼と見り不多く素人の書と

かありぬ

○或人の曰六月十六日と嘉定も書又嘉祥も書

曰林道春先代の死後後

嘉定漢文と云ふりて食物と個(御給小供)と

例と既作のほも用ひぬして日陰と云ふ事

又六月廿七日の記は仁明天皇の御宇承和子

と云ふ事其記の記は仁明天皇の御宇承和子

と云ふ事其記の記は仁明天皇の御宇承和子

と云ふ事其記の記は仁明天皇の御宇承和子

と云ふ事其記の記は仁明天皇の御宇承和子

心算の文字と書し又元禄年中將軍家の
六月十六日徳候順彦の記に大史の筆に嘉祥と
見へし嘉定の字にふりては是れと云はれ
況各所の利候も尚大史の書方取と用い
○此人の曰南都大寺小堂無待の信小堂無待
の文字中と冠と亭と云て東大寺といふは
蘭の内と東の字に東あはれは難ひ矣也
あや 曰晋の王儻が三刀の書方と記三刀別
乃字と云は是れ大なる誤し信小別と州の同字と
碑事し別は音離割と別と是れ今別字し
板の事と州の自ふりては信小の事なり

代の法則はなかりては信小の形状記小枝
と梨と用ひ梨は西乃本と書しといふは是
も西と西と似ては字加栗の字も西と云は
何の字も如くは信小の字なり
は難ひ毛筆小いへはあはれは叔葉無待の本名
は英熟香といふは又天子の白菊也
株と云ふ
そくおわかと惟ふくいと書来り
林のちれ白きく乃とれ
又細川家には初書といふ
まぐたひいりては信小の事なり

牛馬の記

上

い何も初書れりて此よりすれ
伊達も歌ふては柴舟といふ

世の中此う記を留まはむ柴舟のみ乃
そくぬあさきしりもあられ

右三短之れに蘭奈結好也

○本人の曰中船の糸代信詩文志を作為し遷ふ
唐人の姓名ふ似人事を移りし氏は一字よりして通
用は海とて皆是なりけし事めり 曰是下此言

志る願ふ美人の姓を移し其姓染なりとの多
又微生端本新垣長桑子桑叔梁樂正巫馬司
馬歐陽西藤のこし記複姓も又多し又侯力候

侯伏斤可地延可朱暉の類は三字姓もあれどもと

日本の系代りとも杜撰は畧者なり事と不實

馬と字姓司る巫子は複姓なり第一字と着て

馬といふ何の別取らん樂は單姓樂正は複姓

一字姓者て樂といふは是又何の別取を以てせん

是上の一字姓者く應りて下乃一字を去りて次

中船此糸代を足れぬ望は望月といひ氏月何系と

書えは唐めめとて望何系と書又土柳といひ六

上何系と書ては唐乃といふとて柳何系と云

類ひかゞり方より應あはれ是上下の文字を去り

此用ひて定りたりそとひ姓名の美人は似たり

とも自修のの穂穂なるの妙絶とス人もの
ありぬ姓を先祖の相承根元し氏の子孫出せと
別なり姓の枝乃とて本姓氏を以て氏のもの
新多の多しとて文字新のしと先祖と知と事と
屋の屋に雲の新田新山新村新川新岡新庄
新舟の氏乃とて各由てあり余とて一姓とて
て一字新とて新何事といふは他氏族の出
別人始後後とていふものなり
○江戸のてとて蓮とてて扱へる根本の新乃新
いふとて帯とてとてとて同よカレダバキとて
江戸新田とのいふおれ皆人新田の作里おれ

のとおしとて帯とての帯なり

後編牛馬問

嗣出

寶曆六柄子孟春

大坂高麗橋一丁目

吹田屋多四郎梓

皇都書林

寺町通三條上ル丁

菱屋新兵衛行

